

# 新旧技術の粋

大津の素材業者などが万年筆

## 1本250万円



特殊な炭素を材質に使い、京蒔絵で装飾を施した高級万年筆(3日、京都市中京区)＝撮影・坂本佳文

京蒔絵の装飾、固まりにくいインク

京蒔絵の伝統技術を用いて、花鳥風月のきらびやかな装飾を施した高級万年筆を、京漆器の象彦(京都市北区)などが開発した。熱伝導率の高い炭素を材質に使用し、インクが固まりにくいなどの機能性も備え

た。最高価格のモデルは1本250万円で、海外の富裕層や国内の万年筆コレクター向けに受注販売する。炭素材料の開発を手がける大木工藝(大津市)を中心に象彦、セーラー万年筆(東京都)が連携して開発した。

万年筆の本体とキャップは、朱や黒の漆を塗った上に、蒔絵や螺鈿で絵柄を施した。白いクジヤクを描いた最高級モデルは、使用による柄の黒ずみを抑えるため、銀粉の代わりにブラチナ粉を使用。飾り羽の重な

りを細密な線で表現し、目の模様は螺鈿で輝きを再現している。工程は4人の職人が担当し、完成には最長3カ月かかる。象彦の担当者は「伝統工芸の粋を集めた製品。日本の漆文化を知ってもらいたい」と話す。

材質は大木工藝が製法特許を持つ特殊な炭素を使用。導電性が高く静電気が発生しにくい上、熱伝導率が良いことから、使い手の体温が伝わることでインクの硬化を防げるという。

絵柄は波千鳥や矢羽根などの伝統的な図柄を中心に計27種類。1本48万円から。象彦の京都寺町本店(中京区)で注文を受け付ける。

(近藤大介)